

## 大田黒元雄氏の優雅なロンドン生活

「数へてみると、私はまだ五度しか大西洋を渡つたことがない。一度は春、二度は夏、あと二度は冬である」（『大西洋』）。昭和七年に、こう随筆に書いたのは、かつての大田黒公園の主で、音楽評論家だった大田黒元雄氏である。氏は、第一次大戦前に留学のため2年間ロンドンに滞在しているが、この文章から、大戦後も、度々、ヨーロッパへ渡っていたことがわかる。各地を旅したようだが、長期間、滞在したのはロンドンで、ホテルに逗留することもあれば、間借りをしていたこともあるようだ。『ロンドン生活』という随筆によれば、その毎日は優雅なものであった。

八時半起床。窓からケンジントン公園が見える浴室で入浴。女中が運んできた朝食をとる。家主の細君と、ひとしきりコンサートや芝居の品定め。細君はブリッジや競馬にも目がない。

「一人になつたが、さてすることがない。昨夜読みかけたウォレスでも読もうか。いや、ピアノでも弾かう」。ウォレスは『キングコング』の脚本でも知られる探偵小説作家だ。

近所のイタリア料理屋で昼食を済ますと、「今日は洋服屋に約束があつた。バスで行かう。（略）公園の中を滑るやうに行く無数の自動車。ロオルス・ロイス、デエムラア（ダィムラー）、サンビウム。あの鼠色のロオルスのランドレッ



1920年代のロンドンリーゼントストリート

ドはスマートだな。あんな車に乗ってみたい」。自動車も、ファッションや探偵小説などと並んで氏が情熱を傾けたものの一つである。

洋服屋で仮縫いを済ますと、コンサートのチケットを購入し、ウィンドー・ショッピング、宝石屋の窓に一七カラットのダイヤ。ピカデリへ出て、午後のお茶はダアジリン。馴染みのレストランで、スープに冷たい海老とサラダを食べて、ご帰館。女中が来週分の部屋代をと頼みにくる。奥さんの賭け事の軍資金らしいが、快く払ってやる。風呂に入って、十時半就寝。

「荻窪の記憶」プロジェクト 松井和男